農業土木学会　会長
　　中野　政詩様

スチューデント委員会

スチューデント委員会（第１期）の報告

１．はじめに

スチューデント委員会は平成４年12月に、①学生・大学院生からみた農業土木教育のあり方の情報交換、②学生・大学院生のための研修会・講演会の企画（国内・海外）、③学生・大学院生の連絡・交流の支援などを任務とする定期委員会として発足した。その後、平成７年４月までの２年５カ月間に16回の委員会を開き、上記の任務に関する諸課題に取り組んできた。スチューデント委員会は、時限付の定期委員会であることから、委員会を構成するメンバーは当初の任務をある程度実行した段階でその活動を総括し、公表する義務があると考えている。同時に、人心一新の意味から、ひとまずスチューデント委員会（第１期）の委員の任を解き、改めて理事会にその必要性の判断を委ねたいと考える。

この報告書は、かかる意味から会長を通じて理事会に提出するものである。また、学会誌上にも公表して、スチューデント委員会のこれまでの活動について大方の批判を仰ぐためのものである。

２．個別的な取り組みの成果と今後の課題

1)学生割引制度（資料１，資料２）

スチューデント委員会は、学生会員の増加による明日の会員の確保と学会の活性化・若返りを実現すべき目標として掲げた。そのために、「学生が会員になることによるメリットは何か？」を検討し、その目玉の一つとして学生割引制度を導入した。

この制度では、①学生年会費、②ハンドブック、用語事典の三点セットの合計価格30,800円を20,000円に設定した（定価の65%）。この価格は、ハンドブックと用語事典の会員特価よりも安く、かつ学生の年会費分が補塡されるものである。

本制度導入に対して、一部の会員から「学生を甘やかし過ぎだ」という意見もあったと聞いている。しかし、スチューデント委員会としては明日の学会を担う学生会員の増加が、将来において重要な意味を持つことを確信して、出版企画委員会の承認を得て三点セットの学生割引制度を確立した。この結果、割引制度を利用した学生会員登録数は約２５０名となった。今後は、本制度を大いに宣伝し、さらに学生会員の増加を期待したい。

2)海外学生研修旅行（資料３、資料４、資料５、資料６、資料７、資料８）

1993年度はインドネシア（10泊11日、学生16名、教官７名参加）、94年度は台湾（５泊６日、学生21名、教官４名参加）で実施した。参加学生全員から「参加してよかった」という声が寄せられており、今後も引続き実施することが期待される。２回の経験から、次のような実施上の問題が指摘できる。①コーディネーターについて：参加費を安くし、かつ内容の充実した研修旅行とするには、企画のすべてを旅行代理店に依頼することができない。そのため、大学教員が実質的なコーディネーターを務め、現地案内は訪問国の研究者・大学教員等に依頼することが重要である。②事前の研修、資料の準備、および学生の企画参加：事前に訪問先について学習したり資料を作成することは、研修旅行の意義を高めることにつながる。しかし、参加学生が全国に散らばっているため事前の学習を組織的に行うことができず資料の配布にとどまった。また、学生が企画に参加することは成し得ていない。③学会の支援体制について：学会主催であることから学会の財政的な支援は今後も必要であり、毎年度の予算として確保する必要がある。

なお、参加学生の手によって研修旅行のビデオ、記念文集が編さんされている。

3)学生ビデオコンペ（資料９、資料10、資料11、資料12）

「学会に学生が自由に表現・参加できる場を！」とのことで、農業土木学会９３，９４年度大会にてビデオコンペを開催した。ビデオ機材等の問題が懸念されたが、全国の農業土木専攻の学生から総数５点の応募があった。どれも身

近な学生生活や農村風景等を取り入れたユニークな秀作であった。大会においても反響が大きく、多くの視聴者を集めた。何よりも特筆すべきは学生各々が制作の過程で友情を深めた事、そして農業土木学会というものを身近に感じるようになったことである。特に三重大ではこれを契機に学生たちが自主的に自分たちの学科紹介ビデオを制作したほどである。

問題点としては、技術・機材の面でビデオ制作の条件が整った大学がまだ少なかったという点があげられ、このビデオコンペを継続するのは困難に思われる。しかしながら、このような学生が自発的に参加・発表し、そしてそれが評価される場というものの有効性はこのビデオコンペで十分に確認する事ができた。今後は、ビデオ以外の内容に変更する必要があるが、このような学生参加の企画は継続すべきものと思われる。

4)学生せいたい学入門（資料13）

各大学で大学院生が増加する傾向の中で、学生会員の活動を他の大学の学生や一般会員にも知ってもらう目的で、従来のスチューデントボイスの紙面２ページを使って６月号からこのコーナーが始まった。この企画により意外に知られていない各大学独特の雰囲気や学生会員の生活実態が公開され、堅苦しい記事の多い学会誌の中で学生会員や若い一般会員には手ごろな息抜きページとなっている。特に、７月号に出現した漫画を使った解説はユニークで新鮮味があった。しかし全体的にはこのコーナーの執筆を各大学に割り当てたためか、「学会誌」ということを意識して自己規制している文章が目立った。今後は学会誌編集委員会とも連携して、学生せいたい学に対する他大学による論評や学生による教授生態学入門など、自発的な投稿がしやすい雰囲気作りを検討する必要があろう。いずれにせよ、このコーナーが学生会員ならではの刺激あるページになることを期待したい。

5)全国大会懇親会の学生割引制度（資料14）

平成６年の金沢市で開催された全国大会において、初めて懇親会の学生割引制度が実施され、48名もの院生が参加した。従来の参加費の約半額で参加できた院生の多くは、①他大学の院生と知り合い、多くの情報交換できたこと、②学会発表の場ではなかなか実現できなかった先生方と話ができたこと、などの利点を指摘し、制度の継続を希望していた。本委員会としても、さらに、③若手研究者の育成と新しいアイデアや視点の活用、④情報交換の場を増やすことによる討論の活性化に本制度が貢献できるものと確信し、制度の継続を希望する。

6)事業現場見学会（資料15）

事業現場見学会は、①学生が農業土木事業が実際に動いている活きた現場に触れ、その魅力を知る機会とする、②国（農政局）・県にとっては学生をリクルートする機会として活用できる、③近隣の大学と提携して企画すればより効

果的である、といった趣旨から国内版「学生研修旅行」として、その組織的な実行体制の確立を検討した。1994年２月、都道府県、農水省の土地改良関連部局に事業現場見学会の実施可能性、必要性などについてアンケート調査を行い、「学生のリクルートに苦労している」、「事業現場見学会の必要性を感じている」、「事業現場見学会の実施は可能」などの回答を得ている。

そこで、1995年４月に、国・県の機関に事業現場見学会の企画をお願いする文書を発行するとともに、学会誌上で予定見学会の広報を行うことを通知している。

7)パソコン通信による大学間の情報交換（資料16）

コンピュータネットワークは次世代の新しい情報伝達手段である。学会誌の記事ではフォローしきれず急遽開催が決まった小グループのセミナーの案内や学会誌では議論しにくい軽い話題を取り上げようという目的で、当委員会では94年１月に学会として正式にニフティーサーブに加入し、パソコン通信による情報交換を開始した。当委員会ではこの企画で電子メールと２つのホームパーティ（一般会員用と学生用）による意見の自由書き込み覧を使える環境を整えた。電子メールは海外を含む一部の会員による利用があったが、ホームパーティの方は１年間で19個意見が書かれたに過ぎなかった。今のインターネットの普及状況を考えれば、コンピュータ通信は論文投稿、各種委員会のメーリンリスト整備、学会ニュースやＷＷＷによるミニ学会の開催など、その利用法には無限の可能性を秘めている。学会としてこうした環境整備は急務であると思われる。

8)アンケート調査（資料17）

本委員会では過去２年間の活動の総括と今後の活動に対する意見聴取を目的として、平成６年11月に、短大生・学部生・院生などの学生会員を対象として、アンケート調査を実施した。その内容は、次のように３つに大別される。①個人現況調査（学年や会員になったきっかけなど）、②過去２年間の活動に対する調査（図書購入割引、海外学生研修旅行、都道府県現場見学会、学生ビデオコンペ、パソコン通信、学生せいたい学入門、懇親会学生割引制度）、③今後の活動に関する調査（学生会費、夏季実習、大学間の情報交換、学生・院生セミナー）。このアンケートの結果は、別添資料にまとめられており、分析の結果、次のような点が指摘できる。

9)学生・院生セミナー（資料18）

農業土木の社会的な役割の見直しが強く叫ばれているにもかかわらず、学生・院生がそうした諸課題を考え、議論する機会は狭く閉ざされている。学生・院生セミナーは、こうした状況を打ち破ることをねらいとして、全国の学生・院生が集い、大学教員とともに農業土木の学問分野に関連した諸問題を議論することを目的としている。しかし、今期はそれにまったく取り組むことができ

なかった。ただ、94年度の金沢学会で参加院生のコンパが自主的に取り組まれたこと、東京農工大・信州大・東京大学・宇都宮大学の教員、学生、院生の有志によって、94年夏に学生セミナーが行われたことは、学生・院生セミナーの必要性と可能性を物語るものである。今後、その取り組みを大いに期待したい。

10)学生会員の増加傾向について（資料19）

学生会員数は、委員会の設立された平成４年１２月当時約２２０名であった。その後、本委員会でも学生のための企画を種々立案し、実施してきたこともあり、現在では、５２５名にまで増加した。その中で特に学生会員獲得のための方策として講じられた、３点セットの入会特典は大学担当者に評価され、多くの学生を会員へと導いたものと思われ、入会する際に直接効果のあるこの特典は、引き続き行うことが望ましい。しかしながら、５２５名という会員数は全会員数の４％にすぎず、最終目標を全会員数の１０％とするならば、今後も学生諸君が入会しやすい環境を作り出すことが、会員増加につながるものと思われる。

資料9

第1回「海外学生研修旅行」の実施について（第2報）

農業土木学会スチューデント委員会

学生会員を対象とする海外研修旅行を企画しました。
今回は，インドネシアのジャワ島・バリ島を中心にして，下記の要領で実施します。ふるってご応募下さい。
インドネシアは，1984年に念願の主穀（米）の自給を達成し，これを基礎に現在は工業化を進めつつ，農業面では農民の生活の質の向上をめざして，商品作物の導入等，作付作物の多様化，潅漑用水の管理体制の整備などを図りながら，新たな展開を模索しているところです。
この研修旅行では，①食糧自給達成の基礎となった大規模水資源開発・潅漑施設整備の事業地区，②伝統的な小規模潅漑とその潅漑組織，③高地農業（商品作物の生産地）の状況，④水田農業，とくに稲 -secondary crop- の二期作地，⑤水管理への農民参加を意図した Pilot Project，⑥大学，試験研究機関等を調査・訪問する予定です。

記

1. **旅行日程**：1993年8月22日(日)～9月1日(水)
…11日間
①成田発→ジャカルタ(ボゴール泊)，②ボゴール農科大学ほか(ジャティルフル泊)，③レンバン園芸研究センターほか(バンドン泊)，④水資源開発研究所ほか(バニヨマス泊)，⑤ワダスリンタン潅漑事業，ボロブドール遺跡(ジョグジャカルタ泊)，⑥ブンガワンソロ流域開発ほか(ジョグジャカルタ泊)，⑦プランバナン遺跡→空路バリ島へ(バリ・サヌールビーチ泊)，⑧バリ島の棚田見学ほか(バリ・サヌールビーチ泊)，⑨スバック(伝統的な潅漑組織)訪問(バリ・サヌールビーチ泊)，⑩自由時間，夜，デンパザール発，⑪朝，成田着
＊訪問先は多少変更することがある。
2. **参加資格**：農業土木学会学生会員（応募時の入会も可）
① 保証人の同意書を提出すること。
② 6月28日（月）に参加予定者を対象に東京（農業土木会館会議室13：30～）で説明会と勉強会を行う。地方の参加者への説明会は学会大会時（7月21日）に追加実施するので出席のこと。
③ 研修旅行参加者による報告会（10月）で体験記等を報告すること。
3. **募集人員**：20～25名
4. **参加費用**：航空券，食事，ホテル代を含めて自己負担は25万円。(事前支払分22万円，現地支払い分3万円)。
5. **応募締切**：1993年6月20日(木)
6. **申込方法**：
① 様式（学会誌61巻4号参照）により，保証人の同意書を添付し，農業土木学会スチューデント委員会宛に本人が申し込む。
② 6月20日までに予約保証金30,000円を学会に払い込む。
振込先：連絡先と同じ。
③ 7月上旬，参加者確定後，7月30日までに19万円をJTBに払い込む。
7. パスポート未取得の学生は参加が決定次第，早急に取得すること。
8. **連絡先**：
〒105 東京都港区新橋5-34-4
農業土木会館3階
(社)農業土木学会スチューデント委員会
☎ 03-3436-3418，FAX 03-3435-8494
第一勧業銀行日比谷支店
普通預金口座 045-1167243

学生会員による「ビデオコンペ」作品の募集について（再掲）

農業土木学会スチューデント委員会

農業土木学会スチューデント委員会では，下記の要領にて，学生会員による「ビデオコンペ」を平成5年度大会時において実施する企画をたてましたので，学生会員によるビデオ作品の多数の応募をお待ちしております。

応　募　要　領

1. **応募資格**　農業土木学会学生会員に限る。(ただし，作品の申込と同時に入会可)
2. **テ ー マ**　下記のいずれかとする。

(1) 大学周辺の景観10景（大学および大学周辺）
(2) 農業土木の美
(3) 私の住みたい「まち」

3. 規　格 (1) 時　間：3分以内
(2) 種　類：VHSまたは8mmビデオ
(3) タイトル：最初の5秒間にタイトルおよび作者の氏名と大学名を入れる。

4. **締切期日** 平成5年6月30日(水)必着

5. **選考方法** 平成5年度大会時に作品を放映し，参加者(全員)の投票による

6. **賞　品** 特選3点，入選3点とし，賞状および副賞として特選に図書券1万円分，入選に図書券5千円分。

7. **送付品** 作品のビデオおよび解説文（600字程度）
なお，作品の返却希望者には，後ほどお返しいたします。

8. **送付先** 農業土木学会スチューデント委員会
問合せ先 〒105 東京都港区新橋5-34-4
農業土木会館内
☎ 03-3436-3418

日本農学会「日本農学賞受賞論文要旨」「シンポジウム講演要旨」の販布について（再掲）

本誌3月号会告でお知らせいたしました平成5年度日本農学賞の受賞論文要旨とシンポジウム「人類の生存と生物生産」の講演要旨を学会にて販布することとなりました。ご希望の方は，学会事務局あてお申込み下さい。

- 日本農学賞受賞論文要旨　販価1部700円
（送料1冊の場合175円）
- シンポジウム講演要旨　「人類の生存と生物生産」
販価1部700円
（送料1冊の場合175円）

平成5年度「研究グループ」助成金の公募について（再掲）

(社)農業土木学会研究委員会

平成5年度の「研究グループ」への助成金の募集を行います。この助成金制度は，若い少人数の研究分担者からなる「研究グループ」の育成を目的とし，下記取扱い内規によって実施しております。助成金額は1件20万円程度，3件以内です。

本年度の申請締切は**平成5年6月30日（金）**ですので，助成金を希望される方は期限までに，研究委員会委員長あてにお申込み下さい。なお，申請用紙は学会事務局にご請求ください。

「研究グループ」への助成金取扱い内規

(1) **申請** 学会員は所定の申請用紙に必要事項を記入の上，「研究グループ」への助成金の申請をする。

(2) **認定** 研究委員会は助成金の申請があった「研究グループ」につき，その可否を認定し，学会長に報告する。

(3) **配布** 研究委員会は認定した研究グループに対し，研究連絡費として助成金を配布する。ただし，その配布期間は原則として1年とする。

(4) **対象** つぎの条件を備えるグループ

(イ) 具体的な研究テーマをもち，しかもその研究分野が現在立遅れており，それを研究することが今後の学会の研究活動の発展のための新しい芽になりうること。

(ロ) 構成は本学会員を主とし，構成員は自らその研究に携わる分担者であること。

(ハ) 研究グループには代表者（本学会員）をおき，構成員は原則として3名以上，それらの所属する研究機関が二つ以上であること。

資料10

様式-3

Itinerary of Study Tour in TAIWAN List of Member

name	age	university	position	male or female

※必要事項を英語でご記入下さい。

学生会員による「ビデオコンペ」作品の募集について

農業土木学会スチューデント委員会

農業土木学会スチューデント委員会では，昨年に引続いて学生会員による「ビデオコンペ」を平成6年度大会時において実施いたします。

学生会員によるビデオ作品を募集いたしますので，多数ご応募下さいますようお待ちしております。

応募要領

1. **応募資格** 農業土木学会学生会員に限る（ただし，作品の応募と同時に入会の申込み可）
2. **テーマ** 自由
3. **規格**
   (1) 時間 5分以内
   (2) 種類 VHSまたは8mmビデオ
   (3) タイトル 最初の5秒間にタイトルおよび作者の氏名と大学名を入れる
4. **締切期日** 平成6年6月30日
5. **選考方法** 平成6年度大会時に作品を放映し，参加者（会員）の投票による
6. **賞品** 特選1点，入選3点とし，賞状および副賞として特選に図書券3万円，入選に図書券1万円
7. **送付品** 作品のビデオおよび解説文（600字程度）
8. **送付先** 農業土木学会スチューデント委員会
   〒105 東京都港区新橋5-34-4
   農業土木会館内
   ☎ 03-3436-3418 FAX 03-3435-8494
9. **問合せ先** スチューデント委員会委員長
   宇都宮大学農学部 水谷 正一
   ☎ 0286-36-1515 FAX 0286-35-4662

注）昨年度の応募タイトルは下記の通りです。

(1) 農大周辺の景観
(2) 三重大周辺十景～ある院生の一日～
(3) 東大農学部キャンパスの神秘～文女川の水環境に迫る～
(4) 砂丘の彼方へ～鳥取大学乾燥地研究センター～

農業土木学会もNIFTY-SERVE（パソコン通信）に加入しました（再掲）

最近の情報手段の発達にはめざましいものがあります。手紙のやり取りから原稿のやり取り，はたまたプログラムの交換まで，コンピュータネットワークはどんどん便利になってきています。つい10年前にはワープロなどに見向きもしなかった人も今では当り前のようにワープロを使い，電話で満足していた人がFAXを頻繁に使っています。こうした時代の流れの中でパソコン通信もまた確実に私たちの社会に浸透してきています。

農業土木学会でも学会活性化のひとつとしてパソコンを利用した情報ネットワーク化を考えてきましたが，この度学会のIDを取得いたしました。不慣れな点もありますのでまだ高度な利用法はできませんが，簡単なメールのやり取りと意見交換コーナー（ホームパーティー）の利用が可能です。すでにNIFTYに加入の方は，大いにご利用ください。

1. **学会宛メール LDC02432**

試験的にご利用ください。大切な用件はFAXや郵便も併用ください。

2. **意見交換コーナー（ホームパーティー：HP）**

不特定多数の学会員による情報交換です。新聞の投書欄のような感覚でお使いください。もちろんもっとくだけた感覚でも結構です。

＜HPのアクセス方法＞

(1) ＞GO HP
(1') 2.案内をよむ
(2) 1. Home Partyに入る
(3) ID：LDC02432（大文字）
(4) パスワード：agricivl（小文字）

(5) HP＞read または title

(6) 一連の操作コマンド

HP＞COM　(記事の投稿)

HP＞H　　(コマンド一覧)

(7) HP＞e で終了

その他，詳しい HP の利用方法は(1')に従ってください。

全体を通して不明な点があれば LDC02432 にメールください。

農業土木学会誌への原稿の投稿をお待ちしています！

農業土木学会誌編集委員会

1. 農業土木学会誌62巻の小特集テーマと小特集報文原稿の募集

農業土木学会誌第62巻は下表の予定で編集されることになりました。

各小特集のテーマに沿った原稿を下表のスケジュールに従って広く会員から募集いたします。

学会誌第62巻の小特集テーマの年間スケジュール

小特集テーマ	要旨締切（必着）（A4用紙，1,500字以内）	原稿締切
62巻5号　構造物の更新技術，畑地灌漑の新技術		
6号　大会関連特集		
7号　支部活動および中央研修会		
8号　景観デザイン，冷害対策		
9号　地すべり対策，自主投稿		
10号　水田の公益的機能，農業土木の情報化		
11号　農村環境整備，農業用水の水質保全	平成6年4月15日	平成6年6月15日
12号　海外プロジェクト，中山間地域の農村振興	5月15日	7月15日
第63巻1号　農産物自由化問題と農業土木，水利革命	6月15日	8月15日
2号　構造設計の最新技術，自主投稿	7月15日	9月15日
3号　貴重な環境の保全，農村土地利用	8月15日	10月15日
4号　特徴ある世界の灌漑技術	9月15日	11月15日

＜62巻12月号小特集テーマと内容＞

I. 海外プロジェクト

- 海外技術協力（援助），海外派遣の実態や問題点
- 海外における農業土木（事業）の現状や途上国で必要としている農業土木技術
- 海外プロジェクトの事例紹介など

II. 中山間地域の農村振興

- 中山間地域の地域対策，農村整備，土地利用など
- 中山間地域の活性化への取組み，個性あるミニ事業など活性化の成功例
- 中山間地域活性化のための農業土木の役割

＜63巻1月号小特集テーマと内容＞

I. 農産物自由化問題と農業土木

- ウルグァイラウンド交渉妥結と日本農業の展望
- コメを含む農産物の生産・自給のあり方
- 今後の農業・農村整備の展開方向

＜63巻2月号小特集テーマと内容＞

I. 構造設計の最新技術

- CAD（Computer Aided Design）を使用した構造設計

NEWS

学会ニュース

秀作が集まった第1回学生ビデオコンペ

7月23日，学会全国大会の折りに，コンペ参加作品4点が会場に設けられた特別室で上映された。いずれも傑作・力作で，会場に詰めかけた学会参加者から大いに称賛された。ここで簡単に各作品の内容を紹介しよう。東京農業大学総合研究所院生有志による「農大周辺の景観」は軽快なBGMに乗って，農大キャンパスの情景が紹介された。よくよく見ると，大学にもこんな所があるのだ，ということがよく分かる作品である。三重大学院生・西澤淳氏による「ある院生の一日」は，抜群の編集技術もさることながら，大学院生のマジで切ない一日がわずか3分の作品のなかに，手際よくスマートにまとめられていた。東大院生による「東大農学部キャンパスの神秘―文女川の水環境に迫る―」は10人を越えるスタッフが作成に協力した，10分を越えなんとする（その限りではルール違返！）力作である。パロディ調の内容は笑いあり，ペーソスありの誠に楽しい作品だった。鳥取大学乾燥地研究センター院生・藤巻晴行氏による「砂丘の彼方へ」は，空中撮影を含めて，映像表現の「美」を追求した完成度の高い作品で，研究センターの紹介ビデオとしても十分利用できるほどのものである。ただ，編集の手違いから，ダビングの際に音声の入力がうまくゆかず，無声で上映されたことは返すがえすも残念だった。この点，スチューデント委員会は作者に深謝します。

当初，優秀作品は入選3点，佳作3点とする予定だった。しかし，応募作品が4点であり，会場で行った投票でも甲乙つけがたい結果となったので，4点すべてを入選とし，賞品として1万円の図書券を贈った。　（農業土木学会・スチューデント委員会）

NEWS

国内ニュース

荒井，上田両会員が衆議院議員初当選

7月18日に投票された第40回衆議院議員選挙で，本会会員の荒井聡氏（北海道一区）と上田勇氏（神奈川一区）がともに初当選をはたした。

荒井会員は，昭和45年東大農学部を卒業，農林水産省に入省し，北海道企画振興部企画室長，関東農政局設計課長などを経て，北海道総務部知事室長を最後に退官し，衆院選に立候補していた。

上田会員は，昭和56年東大農学部を卒業，農林水産省に入省し，コーネル大学に留学，九州農政局大野川上流農業水利事業所工事第一課長などを経て，構造改善局建設部設計課海外土地改良専門官を最後に退官し，衆院選に立候補していた。

水を活かし北勢を潤す「三重用水事業」管理業務へ移行

三重県北勢地域の一大水利事業である三重用水事業は，平成4年度をもって建設を完了し，平成5年度より管理を開始した。

この事業は，三重県北勢地域の慢性的な水不足を解消するため，農業用水（最大約6.0 m^3/s，潅漑面積約7,300 ha）と，この地方の発展に伴い需要の

スチューデントボイス

は自分のことですが……。

III. 仮面宇大生の嘆き

ところで，はじめに触れました通り，私は農工大の大学院生なのです。それ故，調査あるいは学会における発表等，公の場に出る場合のあいさつは常に，『東京農工大の……,』というヤツから入ります。とは言うものの，入学して以来，足掛け8年以上にわたり宇都宮に住み，今もなお宇大の研究室に身をおくものとしては，農工大生という自覚がほとんどないのも事実です。言うなれば，『仮面宇大生』とでもいうのでしょうか。主要な手続きは主幹大学(私の場合，農工大になるわけです）でしか行えない，年に数度とはいえ，ゼミも農工大まで出向かねばならない。連合大学院というシステムは全国にいくつもあるものと思いますが，似たような状況で苦労している方もいるのではないでしょうか。

IV. おまけに……

最後に，宇都宮大学における大学院生の生活という本編とは関係ないのですが，ひとつ……。

先日の金沢における学会は実に有意義なものでした。これまでの学会では，懇親会というものが御年配（失礼）の先生方の歓談の場のようになっていたように思えました。私自身，参加したことはあるのですが，なかなか学生の居場所を見つけることが難しかったように感じられたのです。それに対して，今回の学会での大学院生を中心とした懇親会は，本当に楽しめるものでした。専門的な話から他愛ないことまで，忌憚なく話し合えるというのは，なかなかいいものです。自分の所属する大学・研究室の中に閉じ込もっているだけでは，このような同好の輩というものが，一体全体，どの程度いるものなのか，全く見当もつかなかったのですが，そうした連中の顔が見えてきたことも大変に喜ばしいものでした。今後も，こういった企画は続けていきたいものです。加えて，今回の学生懇親会を企画されたK大学N君，改めて御礼申し上げます。御苦労様でした。

というところで，宇都宮大学における大学院生の生活紹介は一巻の終わり，これをお読みの学部生のみなさんが，『大学院って，面白そうやな』と感じ，その存在に興味を持たれることを期待して筆を置きたいと思います。この文章じゃ，無理ですかね。

スチューデントボイス

第2回学生ビデオコンペの結果について

スチューデント委員会

昨年と同様今年も学会全国大会時にビデオコンペを行った。

今年度の応募作品は何とも少ない1点のみであったが，ビデオコンペという性格上皆さんからの投票で審査を行うこととした。

応募作品は，宇都宮大学院生松井宏之氏による「三万円獲得作戦」で内容は学会誌の表紙写真に応募するための写真を撮っている様子がビデオに収められていた。

多数の投票結果から，今回の応募作品は入選として賞金1万円を贈ることとした。

なお，応募作品のほかには昨年度の入選作品，第1回海外学生研修旅行見聞録，三重大学の院生ビデオなどが上映された。

来年も実施する予定なのでご応募いただきたい。